

ク  
ラ  
ツ  
シ  
ユ  
・  
ワ  
ル  
ツ

刈  
馬  
カ  
オ  
ス

【1】

ある日曜の午前。誰もいない、和室。長テーブル。その周りに座布団。窓からは、朝の陽射しが射し込んでいる。

隣家から、子供が練習しているのであろう、ピアノの音が聴こえてくる。たどたどしく、つかえつつかえのメロデー。

ばたばたと足音が近づき、イガラシタエが、クドウリツコの背中を押して入ってくる。クドウは、花束を抱えている。

クドウ ちよちよ、ちよつと、

タエ 座って。

クドウ え？

タエ いいから。

タエは、クドウを強引に座らせると、窓から外の様子をうかがう。

タエ 良かった、気付かれてない……。

クドウ (事態を把握しきれない様子で) あおう、

タエ イガラシです。

クドウ え？

タエ イガラシタエ。ほらこれ、免許証。(写真と自分の顔を交互に指して) ね、同じ顔。

クドウ はい。

タエ (免許証をまた指して) 城方町3丁目240の7。ここ住所。ね？

クドウ はい。

タエ この家に住んでる、イガラシタエです。

クドウ はい。

イガラシ マリオ (40代) 交通事故現場の前にある家に住む、夫。

イガラシ タエ (40代) 交通事故現場の前にある家に住む、妻。

ミタ リョウスケ (30代) 交通事故で子供を亡くした、父親。

タケイ チハル (30代) 交通事故で子供を亡くした、母親。

クドウ リツコ (20代) 交通事故で子供を死なせてしまった、女。

ミタ ケンタロウ (享年5歳) 3年前の事故で亡くなった、子供。

タエ 身分、明かしたから。

クドウ はい？

タエ 怪しい者じゃないから。

一瞬の沈黙。

クドウ (我に返って) え、ちょっと待って、なんで私ここにいるんですか？

タエ 大丈夫。怪しくない。

クドウ 怪しいですよ。

タエ (また免許証を見せて) 本籍地は小野崎市東西区川俣3丁目9番。

クドウ、タエが言ってる途中で去ろうとする。

タエはそれを押しとどめる。

タエ どこ行くの。

クドウ 帰ります。

タエ 怪しくないの。

クドウ そんなこと言われたって、

タエ じゃあどうすりゃいいの！

クドウ、驚き、立ち止まる。

タエ 怪しくないの。どうしたらわかってもらえるの。

クドウ (困惑して) だって、いきなりですよ？いきなり家に連れ込まれて、

タエ いきなりじゃなかったら来てくれた？ねえ？来てくれた？

クドウ 話があるなら道端でも、

タエ 駄目。見つかったらどう。

クドウ 見つかる？

タエ こうするしかなかったの。

クドウ 見つかるって、誰に？

タエ 1つだけ約束して。そうしたら、ここをどくから。

クドウ なんですか？

タエ 交差点に行かないで。

小さい沈黙。

タエ ちょうど、その窓から見えるの。3年間、あなたが交差点に花を供えるのを、私はずっと見ていた。

クドウ ……。

タエ ケンタロウ君、っていうんでしょ？白い花が好きだったの？お母さんにこんなに愛されて、ホントに良い子だったのね。

クドウ ……違います。

タエ ……？(名前を間違えたかと思ひ)ケンタロウ君、でしょ？

クドウ 違うんです。行かなくちゃ。

タエ 今日は駄目。今日は駄目なの。

クドウ でも私、

タエ 今日だけお願い。

クドウ でも私……！

タエ 本当は邪魔したくない！でも、今日は駄目なの！

タエに気圧されて、クドウは沈黙する。

タエは、窓の外を気して、クドウを牽制しながら、窓際ににじり寄る。

タエ そのまま、そのまま……いい？

窓から、外の様子をうかがう。と、表情に緊張が走る。

タエ いない！

クドウ え？

タエ うそ、なんで！？

クドウ なにが？

タエ 逃げて！

クドウ え？

タエ 帰ってくる！

【2】

廊下からマリオの声。

マリオ タエ！タエ！

タエ はい！はい！

タエは返事をしながら、クドウに座布団をかぶせて隠す。

マリオは、チハルの腕を掴み、引っ張り込もうとしながら現れる。

チハル 痛い痛い痛い！離してください！

マリオ 警察！警察！

タエ (状況がのみこめず) なに？

マリオ 泥棒だよ！

タエ え！？

チハル 違います！

マリオ 勝手に上がりこんで何言ってる！

チハル 痛い痛い痛い！

チハルは部屋にひきずりこまれた。

タエ (チハルの顔を見て) あれ。

マリオ えっ。

タエ あなた、どこかで見たような……。

マリオ なんだ、知ってるのか？

タエ どこかで……。

マリオは、座布団をかぶったクドウに気付く。

マリオ ……誰？

タエ (クドウの前に立ち) 誰でもない。

マリオ え？

タエ 知らない人。

マリオ なんで知らない人が…… (ハツとして、チハルに) 仲間か！？

チハル 違います！

クドウ (声に聞き覚えを感じて) ミタ様……？

マリオ え？

クドウ ミタ様の、奥様……？

小さい沈黙。

チハル お久しぶりです。

クドウ ご無沙汰しています、その節は本当に……！ (と、土下座する)

チハル クドウさん。

クドウ 申し訳ありませんでした！

チハル それはもう、

クドウ でも！

チハル 顔を上げてください。

しかし、クドウは頭を垂れたまま……。

マリオ (タエに) どういうこと？ (クドウに) ほら、ああ仰ってるんだから顔を上げて。

タエ ミタさん……？

チハル はい。

マリオ (クドウに) ほら。

タエ ミタ、ケンタロウ君の、お母さん……？

チハル はい。

マリオ (タエに) どうなってるんだ。

タエ それじゃあ、あなたは…… (と、クドウを見る)

マリオ え？

タエ そう……：そうなの……私につきり、花を供えてるのはお母さんだと……。

マリオ 花？ (と、クドウの傍らに花束があるのを見て) 花！ (タエに) この人か！？

タエ そうなんだけど、でも、

マリオ (クドウに) 待ってたんですよ、あなたがいらっしやるのを。朝から待ち伏せして、今か今かと…… (ふと、タエに) おい、なんでこの人、ウチにいるんだ？

タエ そんなのどうだっていいでしょ！

マリオ (気圧されて) そうか…… (やはり納得がいかず) そうかあ？

チハル 待ち伏せ？

マリオ ああ、そうそう。(クドウに) 話があるんです。

クドウ 話？

マリオ お願いと言ってもいい。

タエ ちょっと今日は。

マリオ え？

タエ やめときましようよ。

マリオ なんて？

タエ (クドウとチハルを気にして) だって、ねえ？

マリオ 千載一遇のチャンスじゃないか。

タエ また今度でいいじゃない。ほら、今日は私、ソブエさんとこ行かないと。

マリオ あんなヤブ医者。

タエ 良い先生よ？親切だし、それに……親切。

マリオ 行ってこいよ。こっちはやっつくから。(クドウに) 実は、

タエ (腹部を抱えて) 痛たたたたた。

マリオ おい、薬のんでこい。

タエ 持ってきて。

マリオ どこ？

タエ 茶色い棚に入ってるから。

マリオ、行こうとするが、

クドウ 話ってなんですか。

その言葉に立ち止まる。逡巡した結果、

マリオ (花を指して) そのことなんです。

タエ (行かないので) ちょっと、

マリオ お前は菓のんでこいよ。

クドウ 花？

マリオ そう、花。

タエ こんなときに話すことじゃないでしょ。

マリオ なんだよ、こんなときって。

タエ (2人を気にして言葉を濁すように) だから、

マリオ やっとお会いできたんだよ？

クドウ 花が何か？

タエ いいんです、気にしないで。

クドウ 花がなんですか？

マリオ お供えするのをやめていただきたいんです。

小さな沈黙。

マリオ すみません、私どもの勝手な都合だというのは重々承知しております。で

すが、花はもう供えないでください。

クドウ ……。

マリオ 本当は、こんなこと言いたくないんです。私どもは、この3年間、毎日花を

眺めてきました。そのたびに、あの痛ましい事故を思い出し、ケンタロウ君

の御冥福を祈るばかりです。

クドウ でも、なんで……。

マリオ 私どもは良いんです。全然良いんです。だけど、花があることを嫌う人がい

る。

クドウ 誰が……。

マリオ これから、ここに住む人たちです。

クドウ これから……？

マリオ ここに、マンションを建てるんです。しかし、業者が言うには(花束を指し

て)それが、販売価格に影響すると。道端に花が供えられている。それは、

ここで人が亡くなったという証になってしまう。考えてもみてください。

小さなお子さんがいる家族には不安を与えますし、何よりも、やはりこう

……あまり気分の良いものではないですから。

クドウ ……。

マリオ できれば、あなたの邪魔はしたくない。思う存分、ケンタロウ君のことを申

つてあげてほしい。お子さんを亡くした、あなたの気持ちを踏みにじるつ

もりはないんです。

タエ ちよつと、

マリオ あなたのようなお母さんの元に生まれて、ケンタロウくんは幸せだったと

思います。だから、

タエ (さえぎって) 違うから。

マリオ え。

タエ 違うから。

マリオ なにが。

タエ ケンタロウくんのお母さんは(と、チハルを見る)

マリオ (タエの視線を追ってチハルを見て) え？じゃあ、こちらは？

クドウ クドウと申します。

マリオ (まったくピンと来ず) クドウさん？

クドウ あの事故を起こした……。

マリオ ……!!

チハル、立ち上がる。3人、そちらを見る。

クドウ ……。

チハル お手洗いを。

タエ あ、じゃあこちらに……(と、腰を浮かすが、クドウとマリオを残すことに

気付き、中途半端な姿勢で止まる)

マリオ どうした？

タエ あなた、御案内して。

マリオ どうして？

タエ お願い。

マリオ 行けばいいじゃないか、そこまで立ったんなら。

タエ 無理。

マリオ え？

タエ これ以上は無理。

マリオ 足が痺れたのか？

タエ そう、足が痺れたの！

マリオ (立ち上がり) 早く言えよ、そういうことは。

タエ ごめんなさい。

マリオ どうぞ、こちらです。

チハル ありがとうございます。

マリオが先立って、2人は去る。

タエは途端に素早く動き、廊下を確認して、

タエ 逃げて。

クドウ え。

タエ 今のうちに、早く！

クドウ ダメです！

タエ なんで！

クドウ 足が痺れて……。

タエ 言ってる場合じゃない！

タエ、クドウの腕を引っ張り、無理矢理立たせる。

クドウ あ、ちよちよちよ！

タエ 静かに！

タエ、クドウを連れて去る。花束が残される。

### 【3】

無人の空間。

隣家からピアノの音が聴こえてくる。

たどたどしく、つつかえつつかえのメロディ。

しばらくして、マリオが戻ってくる。誰もいないことに驚き、固まる。

マリオ あれ？え、おーい！おーい！

ばたばたとタエが帰ってくる。

タエ はい、はいはい、はい。

マリオ どこ？

タエ え？

マリオ どこ？

タエ ああ、帰っちゃった。

マリオ かえっ……！？なんで！？

タエ なんか、用事があるって。

マリオ じゃなくて！なんで帰すんだよ！せっかく……！！(と、気落ちするが)まだ

間に合う！

マリオは行こうとするが、タエが腕を掴んで止める。

マリオ　なんだよ。

タエ　どこ行くの？

マリオ　追いかける。

タエ　いいじゃない。ほっといてあげよう？

マリオ　後で聞く。

マリオは行こうとするが、タエはしっかりと腕を掴んで行かさない。

マリオ　なんだよ。

タエ　今日はやめとこ？

マリオ　なんで。

タエ　ソブエさんとこ行かないと。

マリオ　あんなヤブ医者。

タエ　良い先生よ？親切だし、それに

マリオ　行けばいいじゃないか。

タエ　付いてきて。お願い。

マリオ　後で聞く。

マリオは行こうとするが、タエはしっかりと腕を掴んで行かさない。

マリオ　なんだよ。

タエ　そんなにお金が必要？

マリオ　あるに越したことはない。

タエ　何に使うの、そんなに。

マリオ　老後の貯え。

タエ　年金があるじゃない。

マリオ　あんなのアテになるか。

タエ　やっぱりそうなの？

マリオ　国になんか頼れるか。自分の身は自分で守る。(と、タエの手を引き剥がそうとする)

タエ　30万なんですよ！

マリオ　(その手を止める)

タエ　ごめんなさい、電話して聞いた。

マリオ　俺に任せとけって言っただろ。

タエ　一戸あたり200万変わるって言ったじゃない。

マリオ　それくらいの方が、お前が納得しやすいだろ。

タエ　私にウソをつけてまでお金がほしいの？

マリオ　30万でも、24戸で720万だ。これがハシタ金だって言えるのか。(と、タエの手を引き剥がそうとする)

タエ　(抵抗して) ねえ、どうして！

マリオ　後で聞く！

マリオ、タエの手を引き剥がし、去る。

タエ　(その背中に) なんで勝手に決めるの！

#### 【4】

タエは、室内に戻り、乱れた座布団を直す。

と、花束が忘れられていることに気付く。

タエ あ。

花束を抱えて、見つめる。チハルが戻ってきた。

チハル クドウさんは？

タエ お帰りになりました。

チハル そうですか。

タエ ごめんなさい、まさかこんな形でお二人を会わせることになるなんて。

チハル ……。

タエ あ、どうぞ（と、座布団をすすめる）いま、お茶を。

チハル おかまいなく。

タエ でも、

チハル ほんとに。

チハル、座る。

タエ ……そう、ですか。

タエ、チハルの向かいに座る。

タエ あの、

チハル （驚いたように）あつ、はい。

タエ （ので）どうかしました？

チハル ああ、いえ、お隣ですか？

タエ え？

チハル ピアノ。

タエ そうなんです。小さいお子さんがとても熱心で、毎日この曲ばかり飽きも

せず。

チハル そのわりにはたどたどしいですね。

タエ これでも上達したんですよ？

チハル これで？

タエ 前はもつつつかえつつかえでしたから。

チハル これよりも？気になってしょうがないでしょう？

タエ 主人はうるさがってますけどね。「いい加減うまくなれ！」って。

2人、笑う。

チハル 苦情、言った方がいいですよ。

タエ ……苦情？

チハル 言わないとわからないから。

タエ いや、そんな大袈裟なあれじゃないんですよ。

チハル ご主人、うるさがってるんですしよ？

タエ ちょっとあれだなんていうくらいですから。

チハル 言いづらいとは思いますが、

タエ 言いづらいとかじゃなくてですね、

チハル こういうのは、あちらにとっても言ってもらった方がいいんです。だって悪気はないんでしょう？

タエ それはもちろん。とってもいい方なんですよ？

チハル 古いお付き合いで？

タエ そうですね、10年くらい前に引っ越してこられて。

チハル ご近所付き合いは？

タエ まあ、挨拶をしたり、何かあったときにちょっと融通するくらいですけど。

チハル なまじ仲がいいと言いつらいとは思いますが、

タエ ですから言いつらいとかではなくてですね、

チハル 私も同じような経験があるんです。だから、わかるんです。

タエ ああ（と愛想笑いをして）なんて言ったらわかるんだこれ。

チハル 私から言いましょうか？

タエ いえいえいえ！

チハル 無関係の人間から言った方が波風立たないでしょうし。

タエ 結構です！

チハル じゃあご自分で？

タエ っていうか、うるさくないんです。

チハル うるさいでしょう？

タエ うるさくないんです。

チハル だって今これ、うるさいですよ？

タエ 今？

チハル 今。

タエ あ弾いてたんだ全然気付かなかった。

チハル いやいや聴こえるでしょう普通に。

タエ 慣れてっていうのは怖いですねえ、住んでると意識しなくなるっていうか、

チハル ご主人は、慣れてないんでしょう？

タエ ……ええ、まあ、

チハル 我慢はいけません。

タエ 我慢だなんて、

チハル ちっちゃなストレスの積み重ねが、大変なことになるんです。私は、胃に穴

が開きました。

タエ 私は気にならないんです。

チハル 気になるでしょう？

タエ 逆に聴こえてこないかと、どうしたんだろう？風邪でもひいたのかな？って心配になるくらいですから。もう全然気になりません。

チハル でもご主人は？

タエ ……。

チハル 無理もないですよ。だってこんな（と、ピアノの音色に耳を傾けて、その拙

さに笑い）ねえ？

タエ （仕方なく笑いつつ）でもね、私、楽しみにしてるんです。ピアノが聴こえ

てくるのを。ちよつとずつ、ちよつとずつですけど、上達してるんです。

チハル ……。

2人、ピアノの音色に、耳を傾ける。

タエの視線が、ゆつくりとチハルの横顔に向けられる。

タエ どこかで、お会いしましたよね？

チハル さあ……小さい町ですから、もしかしたら。

タエ お生まれはこちら？

チハル ええ。イガラシさんも？

タエ （驚き）なぜ名前を？

チハル 表札が。

タエ ああ。

チハル 駅に行くとき、この家の前をいつも通ってたんです。特に気に留めること

もなかったけど、小さい頃から見えていたものですから。こうやってお邪魔

してるのが不思議というか、こんな方が住んでいらっしやっただな、つ

て。

タエ 主人の実家なんです。私は結婚してから、こちらに。まあ、それでも18年

になりますけど。

チハル じゃあ、ご両親と同居？

タエ いえ、今は。2人とも亡くなって。

チハル すみません、立ち入ったことを。

タエ あ、いえいえ（暗くなった空気を払拭しようと、つとめて明るく）そんなわ

けで、いい加減古いものですから、そろそろ建て替えて考えてたんです。そしてたら主人が突然、「マンションにする」って言い出し、て……（チハルに言うべき話ではなかったと）ごめんなさい。

チハル ……。

タエ あの、

クドウが現れた。

【5】

タエ なんで…!?

クドウ 花を……。

タエ、花束を掴むと、クドウに渡す。

タエ 早く行ってください。主人が帰ってくる前に。早く。

チハル クドウさん。

その声に、クドウは立ち止まる。

チハル ちょっと、いいですか？

タエ （外を気にして）でも、

チハル ちよっとだけですから。

クドウ ……はい。

クドウはゆっくりと進み、テーブルを挟んでチハルの向かいに正座する。

チハル 足、どうぞ崩してください。

クドウ いえ。

チハル 膝がお悪かったでしょう？（タエに）バレーボールの選手だったんですって。

タエ ああ。

チハル そのときにケガで。長く正座ができないそう。

クドウ 大丈夫です。

チハル どうか崩してください。楽に。

クドウ 大丈夫です。

小さな沈黙。

チハル びっくりしましたよ。雰囲気、昔と全然変わったから。前はもつと華やかなお召し物だったのに、すっかり地味になられて。

クドウ ……。

チハル お化粧もしてないでしょう？髪もほつたらかし。いけないわ。せつかくお綺麗なのに。ねえ、前はどこの化粧品使ってたの？

タエ あの、そろそろ。

チハル もう？まだ何も話してませんよ？

タエ 主人が帰ってくる前に。

チハル ご迷惑でなければ、もう少し。

タエ 迷惑だなんて、そんな。

チハル 久しぶりなんですよ、こうやってお話しするの。（クドウに）ねえ？

タエ ああ、

チハル 前はどこの化粧品を、

タエ （さえぎって）申し訳ありませんが化粧品の話は。花については、必ず説得します。さあ（と出口に促す）

チハル 説得？

タエ はい。(クドウに)明日からまたじゃんじゃんお供えしてくださいね。さあ  
(と出口に促す)

チハル いいんですか？事情がおありなんでしょう？

タエ そんなのいいんですよ。

チハル でも、

タエ あなた方の気持ちがいちばん大事。そうでしょう？あんなにお辛いことがあつて……

チハル お気遣いはありがたいのですが、

タエ それに比べたらウチの事情なんて。

チハル いや、そんな、

タエ 取るに足りません。

チハル そんなこと、

タエ 取るに足りません。

チハル 大事ですよ？お宅の事情だって大事です。

タエ どうかお気になさらず、これまで通りに。さあ(と出口に促す)

チハル いやいや気にしますよ。

タエ どうして！

チハル どうしてって、

タエ 本当に気にしなくていいんです！

チハル 聞いてしまった以上、無視するわけには。

タエ してください、無視。

チハル そう言われましても。

タエ サラッとスルーする感じで。

チハル あのですね、

タエ どうかひとつ、聞かなかったことに。

チハル できませんよ、そんなこと。

タエ どうしても？

チハル どうしても。

タエ じゃあ忘れてください。

チハル じゃあつて、

タエ 忘れたら全て解決します。

チハル 人間そう都合よく忘れられません。

タエ どうしたらいいんですか！

チハル どうするもこうするも。

タエ 時間を巻き戻したい！

チハル ……それは、同じ気持ちです。

小さい沈黙。

タエ ごめんなさい、あの、

チハル クドウさん、どうします？

タエ え、

チハル こちらのお宅の事情を聞いた上で、どうします？無視して、サラッとスルーする感じで、聞かなかったことにして、忘れちゃいます？

クドウ 私は、

チハル 花を、どうします？

クドウ、手にした花束を見つめると、静かにそれをチハルに向けて差し出した。  
それは2人を隔てるテーブルの上に置かれる。

クドウ お供えしてあげてください。

チハル ……。

クドウ 失礼ですが、お母様。一度も花を供えにいらっしやっませんでしたよね。

チハル ……。

クドウ ケンタロウくん、きつとお母様を待っています。だから、お願いします。この花を、お供えしてあげてください。

小さい沈黙。

チハル 自分の子供が死んだ場所です。2度と見たくなかった。あの日から、ずっと避けていました。

クドウ ……。

チハル 夏の初めに、すごい雨の日があったでしょう？夜になってますます激しくなって、傘の意味がないほどの土砂降りだった。駅前のタクシー乗り場はひどい混みようで、でも一向に止む気配はなくて、仕方なく列に加わって、30分ほど待って、ようやく私の番がきて……。雨の中、タクシーは私の家に向かって走り出しました。そして、しばらくして気付いたんです。あの交差点を通り過ぎようとしていることを。

チハルは、窓際に立ち、交差点を眺める。

チハル 「道を変えてください！」そう、言おうとしたけど、どこかに、もう1度見てみたい気持ちがあつて。やがて、あの場所に差し掛かり、窓の外に見たんです。土砂降りの交差点に供えられた、花を。

クドウ ……。

チハル それから時折、交差点に行くようになりました。そのたびに花は新しく、やがてそれが、クドウさんによるものと知ったんです。

タエ ……思い出した。どこかで見かけたと思つた。あなた、交差点でクドウさんのこと、陰から……。

クドウ え……？

チハル 私は、ケンタロウが死んだ場所を見に来たのでしょうか。それとも、クドウさんを見に来たのでしょうか。

インタホンの音。3人、動かない。

チハル 夫です。

タエ え？

チハル 正確には、元、夫です。あれから離婚したので。

タエ ……。

チハル さっき、トイレをお借りしたとき、電話したんです。

インタホンの音。

チハル (タエに) お願いします。

タエ、仕方なく、出て行く。

2人、無言のまま、じっと部屋にいる。

クドウ ずっと、ご覧になっていたんですか。

チハル ええ、物陰から、そっと。

クドウ 今日も？

チハル ええ。

クドウ この家上がったのも、私が連れ込まれるのを追って？

チハル 気持ち悪い？

クドウ いえ……。

チハル 足、どうか崩してください。顔色が悪いですよ？

クドウは、正座を崩さない。また長い沈黙が、2人の間に流れる。

【6】

タエが戻ってきた。続いて、紙袋を掲げたリョウスケが現れる。

チハル や。久しぶり。

リョウスケ びっくりしたよ。

リョウスケ、ちらりとクドウを見て、固まる。

リョウスケ え…なんで…

チハル よくわかったね。

リョウスケ え？

チハル 雰囲気、昔と全然違うのに。

リョウスケ この顔は一生忘れないよ。

クドウ その節は本当に（と、手をつき頭を垂れる）

リョウスケ （それを無視して、チハルに紙袋を差し出して）これでよかった？

チハル そうそう、ごめんね、わざわざ取りに行ってもらっちゃって。

リョウスケ ちょうど近くにいたから。

チハル、リョウスケに右手を差し出した。

リョウスケ ……？

チハル カギ。

リョウスケ こういうこともあるから、持ってた方がいいんじゃないか？

チハル そう言ってちっとも返さないじゃない。

リョウスケ 勝手に入ったりしないからさ。

チハル、右手を引っ込めない。

リョウスケ、諦めてポケットからキーホルダーを出し、そのうちの1本を外し始める。

チハル 大丈夫だった？

リョウスケ （カギを外しながら）なにが？

チハル 急に呼び出したから。

リョウスケ 別に。

チハル ごめんね、日曜日に。

リョウスケ することもないから。

チハル 来てもらったのはね、

リョウスケ 聞いた。こちらの奥さんから。

チハル そう。

リョウスケ （タエに）ご主人、すぐに帰ってこられるんですね？

タエ 電話したので。

リョウスケ 話はそれからだな。（キーホルダーを放り出し）ダメだ、外れねえや。

チハル そんなわけないでしょ。

リョウスケ いやホントに。すつげえ硬えもん。

チハル 貸して（と、キーホルダーに手を伸ばす）

リョウスケ （思わずキーホルダーを奪い）ダメだよ。ってかムリだって。

チハル ウソでしょ。

リョウスケ え？

チハル 外そうとしてないでしょ。

リョウスケ いやホントに外れな（いんだよ）

チハル （キーホルダーに手を伸ばす）

リヨウスケ ダメだって！

チハル (なおも手を伸ばす)

リヨウスケ だから！

チハル (なおも手を伸ばす)

リヨウスケ わかった！わかったから！

リヨウスケ、ぶつぶつ言いながらカギを外し始める。

チハル 最初からそうすりゃいいのよ。(クドウに) 足、崩してくださいね。

リヨウスケ (クドウに優しい言葉をかけたことに驚き) え。

チハル (リヨウスケを指して) ほら、この人なんかアグラかいてる。

リヨウスケ ……。

チハル あの時みたいに気絶されたら困りますから。(リヨウスケに) ねえ、覚えてる？クドウさんが初めてウチに来たときのこと。返事しなくなっただと思っただら、突然ひっくり返って。(と、思い出し笑いをしてリヨウスケの肩を揺らす)

リヨウスケ (その様子に戸惑い) どうしたの？

チハル なにが？

リヨウスケ だってお前…！(と、クドウを見る)

チハル (クドウに) 私たち、あの頃よりも落ち着いて話ができると思ってます。お互いの立場を尊重して。そう、対等に。だからほら、そんなふうに畏まらなければ、こっちも話しづらいから。どうか楽に。

クドウ いえ、私は、

チハル お願い。

クドウ このままで……

チハル どうしてもダメ？

クドウ すみません……

チハル どうしても？絶対？こんなをお願いしてるのに？

クドウ ……。

チハル (リヨウスケの肩を叩き) あなたからも。

リヨウスケ え。

チハル 「どうぞ」って、ほら。

リヨウスケ 無理強いすることないんじゃないか？

チハル 無理強い？どこが？

リヨウスケ このままでいいって言うてるんだから。

チハル 遠慮してるに決まってるじゃない。クドウさんはね、膝が悪いの。中学の頃、バレーボール部に入ってる、その時に痛めたの。今こうしているのも辛い。だけど私たちに失礼があっちゃいけないって無理してるの。そんなこともわからないの？

リヨウスケ なんてこいつのことそんなに、

チハル こいつなんて呼ばないで。そんな上から目線。これから対等に話そうって言うの。(クドウに) ごめんなさいね。

クドウ いえ、

チハル クドウさん、私が気をつかっているとってるでしょ？本当は足を崩してほしくないけど、気をつかって「楽にしてください」って言うてるって。だからクドウさんも気をつかって「大丈夫です」って。(笑って) でもそれじゃあ、お互い気をつかいつこじゃない。日本人の悪い癖。それにね、私はあなたに全っ然気をつかってないの。本当に足を崩して、楽にしてほしいの。それだけ。ね？だからお願い。無理しないで。

リヨウスケ 無理したいんだよ、こいつは。その方が楽なんだよ。しおらしくして、反省するように見せて、申し訳ありませんって言うてる方が楽なんだよ。

チハル そんなことないでしょ。

リヨウスケ そうなんだよ。

チハル (クドウに) そうなんですか？

リョウスケ 聞かれて、「はい、そうです」って答えるわけないだろ。でも、俺には

わかるんだよ。こいつはそういう人間だ。

チハル だったら、なおさら足を崩してもらわないと。

リョウスケ ……え？

チハル 無理をする方が楽だとしたら、そんなことさせちゃダメ。そうじゃない？

リョウスケ いや、それは、

チハル (クドウに) 辛いかもしれないけど。ね？

クドウ ……。

チハル (リョウスケに) はい。

リョウスケ え。

チハル 「どうぞ」って、ほら。

リョウスケ でも、

チハル ほら。

リョウスケ (釈然としないまま) ……どうぞ。

チハル ほら、早く。ほら。ほら。

チハルに促され、クドウは足を崩し始める。

チハル お、お、お、お……！

クドウは足を崩した。チハルは笑顔で拍手。

チハル これで私たち、対等ね。

【7】

マリオが現れた。

マリオ すみません、お待たせしました。

リョウスケ (軽く会釈する)

マリオ (タエに) なんですぐ電話しなかったの。

タエ ごめんなさい。

マリオ (クドウをちらりと見て) 戻ってきてるなら言ってくれないと。

タエ うん。

マリオ そこらじゅう探したんだから。

タエ そんな状況じゃなかったの。

マリオ だってお前、

リョウスケ (さえぎって) ああ、手短にお願いできますか。

マリオ 申し訳ありません。

マリオ、タエ、座る。

5人全員がテーブルを囲む形になる。

マリオ えーとですね、

リョウスケ だいたいのは奥様からうかがいました。

マリオ ああ、そのまあ、なんと申しますか、こちらの勝手な事情で申し訳ない話なんですけども、

リョウスケ、なぜか笑い出す。

戸惑うマリオとタエ。

リョウスケ いや、失敬。

マリオ (その物腰の柔らかさに戸惑いながら) あ、いえ、

リヨウスケ いえね、まさかこの花にそんな影響があると思わなかったものですか  
ら。

マリオ ああ、

リヨウスケ 呆れるを通り越して、バカバカしくて（と、笑う）

マリオ （緊張がとけて笑う）

リヨウスケ 業者が、そう言ったんですか？

マリオ ええ、

リヨウスケ 価値が下がりますよって？

マリオ そうなんです。

リヨウスケ びっくりされたでしょう？

マリオ そりゃあ、もう。

リヨウスケ 僕もです。

2人 （笑う）

リヨウスケ いやあ、気にする人がいるんですねえ。

マリオ まさかと思いましたよ。

リヨウスケ こんな、ねえ？ちつぽけなものか。

マリオ いやもう完全に予想外で。

リヨウスケ だって事故が起きたのは、お宅の敷地じゃないんだから。

マリオ そう！そうなんです！

リヨウスケ 交差点ですからね。

マリオ ええ。

リヨウスケ ふざけた話ですよ。

マリオ いや、まったくです。

リヨウスケ ご主人もそう思われますか？

マリオ はい。

リヨウスケ じゃあ突っぱねてください。

マリオ ……あ、いえ、ですから、

リヨウスケ 突っぱねればいいじゃないですか。

マリオ そうしたいのはやまやまなんですが、

リヨウスケ じゃあそうしてくださいよ。

マリオ しかし、業者が言うにはですね、

リヨウスケ だから業者の言い分がおかしいんですよ。

マリオ たしかそれはそう思うんですけど、

リヨウスケ ですよね？

マリオ はい。

リヨウスケ じゃあ突っぱねてください。

マリオ （苦笑して）マンションの価値が下がるのは、これはもうどうしようもない

らしいんです。いや、先ほどから申してるように、そんなのおかしいと思

います。思いますけど、でも、こちらにも事情があつてですね、

リヨウスケ 金でしょ？

マリオ ……。

リヨウスケ 結局は、金の話じゃないですか。

マリオ いや、その、

リヨウスケ そのために、我々の心が踏みにじられるんですか？

マリオ そんなつもりは、

リヨウスケ お宅の事情はわかりました。入ってくるはずの金が減ることは気の毒

に思います。でもね、私たちには関係のないことなんです。だいた

い、そういうこと私たちに言いますか、普通？逆の立場だったらどう

ですか？自分の子供が死んで、そんなこと頼まれたら。

マリオ ……。

リヨウスケ お子さんは？おいくつですか？

マリオ ウチには、子供がいないので。

リヨウスケ ああ、だからですか。

チハル ちよつと、

マリオ お願いします。あなた方が「やめろ」と言えば（クドウを指して）この方はやめるんです。

リョウスケ そうしたらどうなります？この人は、どうやって罪を償うんですか？

マリオ それは、花じゃなくても別の形で、

リョウスケ 花を供えることは、この人が罪を償う、大切な儀式なんです。

マリオ それはそうなんでしょう。しかしですね、

リョウスケ やめさせません。絶対に。

マリオ ……。

リョウスケ これ以上、私たちから奪わないで下さい。

リョウスケ、立ち上がる。

リョウスケ （チハルに）行こう。

リョウスケは去ろうとするが、マリオが立ちふさがる。

マリオ 待ってください。

リョウスケ どいてくれませんか。

マリオ 話を聞いてください。

リョウスケ 話すことはありません。

マリオ こっちにはあるんです。

リョウスケ なんなんですか。

マリオ あれから交差点は変わったんです。信号ができました。ガードレールがで

きました。あの教訓を踏まえて改善されたんです。もう2度と、あんな不幸

な事故が起きないように。

リョウスケ ……。

マリオ わかりますか？ケンタロウ君の死は、無駄じゃなかったんです。ですから、

リョウスケ よく言えるな、そんなこと。

マリオ え、

リョウスケ ケンタロウの命は信号か？ガードレールか？そんなものと引き換えに

死んだってのか！

マリオ そんなつもりじゃ、

リョウスケ、出て行こうとする。それを必死に食い止めるマリオ。

うろたえるタエ。じっと座ったままの、チハルとクドウ。

マリオはひざまずき、土下座する。

マリオ お願いします！

リョウスケ ……。

マリオ お願いします！

リョウスケ そんなに金がほしいのか。

マリオ 私たちには必要なんです！

タエ いらないでしょ、そんなに。

マリオ 必要なんです！お願いします！

リョウスケ やめてください。

マリオ お願いします！

リョウスケ 無理です。

マリオ お願いします！

リョウスケ 部外者に、とやかく言われる筋合いはありません。

小さい沈黙。

マリオ たしかに……私たちは部外者です。にも関わらず、あなた方の事情に巻き

込まれている。

タエ ちよっと、

マリオ たまたま交差点の前に住んでいただけなのに。

リョウスケ 巻き込んでるのはそっちの事情だろ。

マリオ こっちは生まれた時から住んでるんだ！あんたらは自分のこと被害者だつて言うけどな、いちばんの被害者はこっちだよ！

リョウスケ 文句があるなら、あの女に言えよ。

クドウ ……。

リョウスケ 花はなくさせない。絶対に。

マリオ でしたら、こちらもそれなりの対応をします。

リョウスケ は。

マリオ 友人に弁護士がいるので、そちらを介すことに。

リョウスケ 訴えるのか。

マリオ 残念ですが仕方ありません。

タエ なに言ってるの。

リョウスケ よっぽど自信があるんだな。

マリオ ええ、そりゃあもう。

タエ やめてよ。

リョウスケ 言っとくが、裁判に勝ってもアンタの負けだ。金欲しさに力づくで俺たちの気持ちを踏みにじった。小さい町ではあつという間に噂になる。

どう見てもアンタが悪者だ。もうこの町には住めない。

マリオ この町は出ていく。

タエ え。

マリオ 土地ごと売っぱらう。後は知ったこっちゃない。

タエ ちよっと待って。聞いてない。

マリオ そういうことで話がついてる。

タエ だって、どこに住むの？

マリオ 沖縄。

タエ 沖縄？

マリオ お前、いつか住みたいって言ってただろ。

リョウスケ いいご身分だな。金が要るのはそういうわけか。

マリオ こっちにリスクは何もない。ただ、無理矢理というのは気が進まない。だから、こうやってお願いしてるんです。

リョウスケ お願い？脅迫だろ。

マリオ こじれてもお互い何のメリットもない。それはおわかりでしょう？

リョウスケ ……。

マリオ 私たちには私たちの生活がある。人生がある。それは譲れない。あの事故には胸が痛みますが、私たちには何の関係もない。私たちは当事者じゃない。

部外者なんです。たまたま交差点の前に住んでいた。ただそれだけの部外者なんです。

タエ 当事者よ。私たち、部外者なんかじゃない。

マリオ (笑って) 違うよ。なに言ってるんだ。

タエ 何度も言ったじゃない。私たちは、

マリオ (さえぎって) 部外者だ。

タエ 違う。

チハル どういうことですか。

マリオ なんでもないんです。

タエ 事故が起きたのは、

マリオ おい、

タエ 私のせいかもしれない。

小さい沈黙。

リョウスケ ……なんだよそれ。

マリオ 違うんですよ。

チハル どういうことですか。

マリオ 思い込みなんです。

チハル 奥さん。

リョウスケ 何があったんですか。

マリオ 大したことじゃないんです。

チハル 奥さんに聞いてるんです。

マリオ 妻は不安定なので。

リョウスケ 話してください！

マリオ ちょっと！

チハル お願いします！

リョウスケ 何があったんですか！

チハル 奥さん！

リョウスケ 奥さん！

マリオ やめろ！ ……あんたらのせいだ。

リョウスケ は、

マリオ あんたらが女房を追いつめたんだ。

リョウスケ なに言ってるんだ。

マリオ どうしてくれるんだ！

タエ お願い、

マリオ あの日からタエは……！！

タエ お願い！話をさせて……

マリオ だけとお前、

タエ お願い。

マリオ ……。

タエ お願いします。

マリオ、他の3人の顔を見る。

マリオ ……勝手にしろ。

マリオは部屋の片隅へ。タエは、3人に向き直る。

タエ 前から、危ないと思っていました。あの窓から、交差点を眺めるたびに。

見通しが悪いのに、人通りが多くて、車も多くて、信号はなくて、いつか大きな事故が起きるんじゃないかって、そう思っていました。あの日までの5年間、ずっと。でも、何もしなかった。警察とか、役所とか、そういうところに行くこともしなかった。していたら、きっと何かしらの対策がとられて、あの事故は起きなかった。そう思えてならないんです。

リョウスケ ……え（と、チハルと顔を見合わせる）

チハル ……。

マリオ どうですか。妻の、罪の告白を聞いて。

リョウスケ いや、なんというか……

マリオ （困惑した様子に満足げに笑い）いや、無理もないです。本人は気に病んでいます。この程度のことなんです。当事者なんて大袈裟に言ってますが、おこがましいくらいです。

タエ 私が声をあげていれば、ケンタロウ君が死ぬことはなかった。

マリオ もうよせ。

タエ クドウさんが罪を背負うことはなかった。

マリオ よしなさい。

タエ ミタさんが苦しむことはなかった。

マリオ よさないか。

タエ だって私は、

マリオ 思いつめすぎだって言ってるだろう。

タエ でも、

マリオ きつと他にも危ないと思ってる奴はいた。でも、誰も何もしなかったんだ。

タエ 私が何もしなかったことには変わらない。

マリオ (笑って) お前ひとりじゃ何も変わらないよ。

タエ あなたに相談したときのこと、覚えてる？

マリオ え？

タエ 事故が起きる、半年前。

マリオ ああ、覚えてるよ。

タエ 嘘。

マリオ 覚えてるよ。

タエ じゃあ何があったのか言ってみてよ。

マリオ ……。

タエ あなた笑ったの。私が相談したとき、笑ったの。「安全だよ」「事故なんて起きるはずない」「ずっと大丈夫だったんだから」

マリオ ……俺が悪いのか。

タエ 違う。

マリオ 俺のせいで事故が起きたって言うのか。

タエ あなたはきつと、私の不安を取り除こうとしてくれた。私が言っほしい言葉を言ってくれた。

マリオ (胸のざわめきを振り払うように強く) あんな事故、誰が予想できる？想定  
の範囲外だったんだ。

タエ 私はそれを信じた。信じたい言葉を信じた。

マリオ 俺たちは何も悪くない。あの窓から眺めていただけ。ただの傍観者なんだ。

タエ 罪のない傍観者なんて、いないんだよ。

マリオ ……。

タエ、3人に向き直る。

タエ あなたたちの人生をメチャクチャにってしまったのは、私かもしれません。  
申し訳ありませんでした。

タエ、深々と頭を垂れる。

クドウ やめてください…私を被害者にしないでください。私の罪をとらないで。

チハル クドウさん。

クドウ 花は供えます。これからも、ずっと。

マリオ しかしですね、

クドウ お金は払います。花がある場合とない場合の差額分。それでいいでしょう？

マリオ いや、それは、

クドウ お願いします。

マリオ けっこうな額になりますよ？

クドウ 一生かけても払います。

タエ いいんですよ、そんな。

クドウ 払わせてください。

タエ 受け取れません。

クドウ 払います。

リヨウスケ いいんじゃないですか、貰っておけば。

タエ え。

リヨウスケ いや、ぜひ貰ってください。

タエ でも、

リヨウスケ この人が差額を払えば、すべて解決するんです。(タエとマリオに) あ  
なたがたは金を手に入れ、(チハルの横に立ち) 私たちは花をなくさず  
に済む。ね、そうでしょう？どうですか、ご主人？

マリオ そうしていただけるのなら、

タエ ダメよ、そんなの！

リョウスケ　なんでですか。

タエ　だって、

リョウスケ　花を供えてほしいんでしょ？

タエ　そうですね、

リョウスケ　じゃあいいじゃないですか。

タエ　それでお金を貰うなんて、

リョウスケ　償いですよ。

タエ　償い？

リョウスケ　お宅に迷惑をかけた、償い。

タエ　迷惑なんかじゃない！

リョウスケ　迷惑だからこんなことになってるんでしょ？（マリオに）ねえ、ご主人？

マリオ　まあ、そうですね。

タエ　ちょっと！

リョウスケ　迷惑でしょう？

マリオ　迷惑です。

タエ　私たちが被害者だって言うの？

マリオ　実際、被害をこうむろうとしている。いや、既にこうむってる。

タエ　まだ何も起きてないじゃない。

マリオ　お前は何も知らないからそんなこと言えるんだ。

タエ　……どうということ？

マリオ　え、

タエ　私知らないことって。

マリオ　いや、だから、

タエ　何が起きてるの？

マリオ　後で話す。

タエ　どうして？

マリオ　どうしてって、

タエ　あなた、いつもそうじゃない。「後で聞く」「後で話す」って、ぜんぶ後回しにして。

マリオ　だから後でちゃんと、

タエ　今話して。

マリオ　今はいいだろう。

タエ　なんで。

マリオ　だから、

リョウスケ　僕たちに、関係することだからですか？

マリオ　いえ、あくまでウチの事情で、

リョウスケ　話してください。

マリオ　……お気を悪くしないで下さいね？噂が流れているらしいんです。

リョウスケ　噂？

マリオ　その交差点は、呪われているって。

タエ　えっ、

マリオ　もう、何人も人が死んでいるって。

タエ　なんで。事故なんて、あの1件だけじゃない。

マリオ　ああ、そうだ。

タエ　この辺の人ならそんなこと誰でも、

マリオ　ここ数年で新しいマンションが増えただろう。よそから来た奴には、そんなことわからない。

リョウスケ　風評被害ってやつですよ。

マリオ　噂が一人歩きしてるんです。

リョウスケ　悪い噂は暴力と言ってもいい。

マリオ　そのせいもあって、業者に足元を見られた。大損害だ。

タエ　そんな噂、信じる方が悪い。

マリオ　じゃあお前、この街の1人1人に説明してまわるのか？

タエ ……。

マリオ 結果には必ず原因がある。あの事故がなければ、こんなことにはならなかった。

クドウ 申し訳ありません……！

タエ クドウさん、いいの。

マリオ (クドウに) 別にいじめたいわけじゃないんですよ？しかし、責任の所在というものがある。

タエ こんなことまで責任をとらせるつもり？

マリオ 俺だって鬼じゃない。花を供えることさえやめたら、他は目をつぶる。しかし、それじゃあ(リヨウスケとチハルを指して) あちらが納得しない。(クドウに) であれば、それ相応の金額をですね、

タエ だから、それこそクドウさんには関係ないことじゃない。

マリオ 関係あるだろう。

タエ 全然関係ない。

リヨウスケ 関係ありますよ。

タエ え。

リヨウスケ 二次災害、三次災害はなぜ起きるんですか？まず、一次災害があるからです。そこには、強い関係がある。

タエ でも、そんな、

リヨウスケ 一次災害がなかったら、二次災害、三次災害は起きなかった。違いますか？

タエ ……。

リヨウスケ クドウさん……あなた、想像したことがありますか？あの事故が、こんなところまで影響を及ぼすってことを。今、あなたは、たまたまこの方たちの事情を知った。だけどね、もしかしたら、まだ他にもいるかもしれないんですよ。あの事故の影響に、苦しむ人が。

タエ やめてください。私たちはいいんです。

リヨウスケ 良くないですよ。(マリオに) ねえ、ご主人。

タエ 私たちが被害をこうむったとしても、間接的なものでしかない。

リヨウスケ 間接的？

タエ ええ。

リヨウスケ 間接的な被害には、責任を負わなくていいってことですか。

タエ そうです。

リヨウスケ 間接的な被害には、謝罪の必要はないってことですか。

タエ ……。

リヨウスケ 間接的な被害には、償わなくていいってことですか。間接的な被害

は……無関係ってことですか。

タエ そうは言ってます。

リヨウスケ じゃあどういふことですか。どこで線引きするんです。犯した罪の関

係は、どこまで及ぶんですか。

クドウ 全部……

リヨウスケ ……。

クドウ 全部です……私に無関係の被害なんてありません。

タエ クドウさん、違うの。あなたばかりが悪いわけじゃないの。だから、

クドウ 償います。

タエ そんなのいいの。

クドウ 償いたいです！

タエ ……。

クドウ 償わせてください……。

リヨウスケ 聞いたでしょう？償うことが、この人の希望なんです。

タエ そんなのおかしい。

リヨウスケ どこが？本人がそう言ってるんですよ？

タエ ……。

リヨウスケ これで、全員の希望が叶うことになります。(マリオに) そうですよ？

マリオ はい。

リヨウスケ では、よろしいですね？

チハル、右手を挙げる。

リヨウスケ なに？

チハル 反対。

リヨウスケ え、

チハル 花を供えるの、反対。

リヨウスケ ……。

チハル もうやめよ？

リヨウスケ ……なんで、

チハル これ以上、クドウさんの人生を奪いたくない。

リヨウスケ なに言ってるんだ。

クドウ やめてください。

チハル (クドウに)あの事故は、ケンタロウも悪かったんです。警察がそう言っ

ました。

クドウ ケンタロウ君は悪くありません。

チハル ブレーキもかけずに飛び出してしまった。

クドウ 私がついとき気がついていれば、

チハル よけようがなかったと聞きました。

クドウ そんなことない。

チハル どうしようもなかったって。

クドウ あなたはその場にいなかったでしょう！

チハル 私は、あなたを、許したい。

小さい沈黙。

リヨウスケ お前、正気か？

チハル ……。

リヨウスケ たしかに、ケンタロウにも非はある。それくらいわかってるよ。けど

な、だからと言って、こいつの罪がゼロになるわけじゃない。俺は許さ

ない。絶対に。

チハル だからって、ダメだよ、あんなこと。

リヨウスケ え。

チハル、さきほどリヨウスケから受け取った紙袋を、クドウに差し出す。

チハル これ、良かったら。

クドウ え。

チハル プレゼント。

クドウ ……。

クドウが受け取らないので、チハルは自ら紙袋の中身を出し始める。

チハル びっくりしましたよ？雰囲気、昔と全然変わったから。前はもつと華やか

なお召し物だったのに、すっかり地味になられて。

紙袋から出てきたのは、何着もの、華やかな服。

チハル 交差点でお見かけするようになってから、ずっと思ってたんです。やっぱり

りクドウさんには、こういう服が似合うんじゃないかなって。それから、ち

よっとずつ買い揃えて。いつか渡せたらって思ってたんですけど、なかな

か機会がなかったものだから。いつの間にか、こんな(と、笑う)

と、1着を手にする。

チハル あ、これなんか昔の雰囲気にとったり！彩り豊かで、人生を楽しむような服。ねえ、ちょっと着てみて？

クドウ え。

チハル ちゃんと似合うか、心配だから。

クドウ 今ですか。

チハル 今。

クドウ、服を受け取り、立ち上がる。

タエ (別室に案内しようと) じゃあこちらに、

チハル (さえぎって) 早く。

クドウ (立ち止まり) ……はい。

クドウ、その場で服のボタンを外し始める。

マリオとリヨウスケは目を逸らす。

タエは席を外そうとする。

マリオ ここにいる。

タエ え。

マリオ ここにいる。

タエ なに言ってるの。

マリオ 俺たちの家だ。出て行く必要ない。

クドウはボタンを外し終えて、上着を脱ぐ。

タエは目を逸らす。

クドウは、さらにズボンを脱ぎ、下着姿になり、チハルから貰った華やかな色の服を着る。それはゆったり目のワンピース。

チハル (拍手して) 良かった！ぴったり！3年前に戻ったみたい。(脱いだ服を手に取り) こんな地味な服、なんで着るの？お化粧も、ずっとしてないでしょ？髪もほつたらかし。いけないわ。(リヨウスケを見て) この人に言われたからって。

リヨウスケ ……。

チハル (リヨウスケに) 罰のつもり？

クドウ 違います。私が勝手に。

チハル (リヨウスケに) なんでこんなことを。

クドウ 私がそうしたかったんです。戒めとして。

チハル (リヨウスケに) ねえ、知ってる？私、ここんとこずつとクドウさんのこと見てたの。

リヨウスケ ……。

チハル 交差点に花を供えるところも、仕事に行くところも、家に帰るところも、買い物に行くところも、あなたとホテルに行くところも。

沈黙。

クドウ ごめんなさい……。

チハル 違うでしょ？クドウさんが謝ること、1コもない。私、見てるもの。ホテルからこの人の車が出てった後、クドウさんが歩いて帰るのを。1時間近くかけて、とぼとぼと。あれは、愛し合う2人じゃない。

リヨウスケ ……。

チハル (リヨウスケに) こんなことして何になるの。

リヨウスケ 何にもならないよ。

チハル 意味ないでしょ。

リヨウスケ 意味なんていらんなんだよ。

チハル じゃあなんでこんなこと、

リヨウスケ こんなことされても何も言えないんだって思い知らせるんだ。

チハル かわいいそうじゃない。

リヨウスケ かわいいそう？誰が？

チハル だから、

リヨウスケ 誰がかわいいそうだって？ケンタロウは殺されたんだぞ！こいつに！殺

されたんだぞ！

チハル じゃあ殺せば？クドウさんのこと、殺せばいいじゃない。

リヨウスケ できることならそうしたいよ！

チハル (クドウに) その方がいっそ。ねえ？

リヨウスケ (マリオに) 何かお借りできますか！

マリオ え。

リヨウスケ 包丁とか、斧とか！

マリオ ウチではやめてください！

リヨウスケ 冗談ですよ！

チハル 冗談なんだ？

リヨウスケ 冗談だよ！

チハル (笑って3人に) ごめんなさいね。笑いの絶えない家庭だったもので。

クドウ (チハルに土下座して) 申し訳ありません！奥様に、不快な思いをさせてし

まって……！

チハル 不快！？私が！？この人との関係で！？全然……！

クドウ でも……！

チハル かわいいそう、こんなに震えて……。

チハルは、クドウの頭を優しく撫でる。

チハル ねえ、クドウさん。言ったでしょ？あなたが謝ること、もうないの。

チハルは、クドウに向けて、土下座する。

リヨウスケ おい……！

チハル ごめんなさい……ごめんなさい……！私たち、あなたの人生を奪ってしま

った！

リヨウスケ やめろ……！

チハル ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！

リヨウスケ ケンタロウの人生が奪われたんだぞ！こいつの人生奪って何が悪い！

チハル あなたもでしょ！

リヨウスケ え……

チハル あなたも、自分で、自分の人生を奪ってるじゃない。

リヨウスケ ……。

チハル あれからずっと、自分自身を責め続けている。あの日のことを、ずっと。もし

も、急な仕事を頼まれなかったら。もしも、子供との約束があるって断って

いたら。もしも、約束通り動物園に連れて行ってたら。もしも、駄々をこ

ねるケンタロウを叱りつけなかったら。もしも、自転車を買って与えなかつ

たら。たかさんの「もしも」に押しつぶされそうになっている。そうでしょ？

リヨウスケ 俺は許したくないんだよ。こいつのことも……自分のことも。

チハル わかるよ。私もそうだから。

リヨウスケ ……。

チハル でも、このままじゃダメだよ、私たち。あの日から、立ち止まったままじゃ

ない。

リヨウスケ 立ち止まりたいんだよ、俺は。

チハル もういいじゃない。

リヨウスケ 忘れたいのか。

チハル ……。

リヨウスケ ケンタロウのこと、忘れたいのか。

チハル 違う。

リヨウスケ 悲しいこと全部忘れたいのか。

チハル そうじゃない。

リヨウスケ 男でもできたか。(すぐに)ごめん。

チハル 忘れたくないし、忘れられるわけじゃないでしょ。

リヨウスケ ……忘れなくていい。思い出して何が悪い。…いや、逆だよ。思い出

すんだ。忘れちゃいけないんだ。俺たちだけじゃない。交差点を通る全

ての人々に知らせるんだ。ここで悲しい事故があったってことを。こ

こで、ケンタロウが死んだってことを。風化させちゃいけないんだよ。

語り継ぐんだ。そのために花を残すんだ。いつまでも、いつまでも、い

つまでも、

チハル それじゃあ、まるで亡霊じゃない。

リヨウスケ ……お前それでも母親か！

チハル 母親よ、私は！ねえ、道端の花を見て、かわいそうって思う人ばかりじ

ゃないんだよ？交差点に立って、1日眺めていたらわかる。花から目を背

ける人、眉をひそめる人、いっぱいいる。誰だって、人が死んだ場所は気持

ち悪いんだよ。でも私は、ケンタロウが死んだ場所を気持ち悪いだなんて

思われたくない！絶対に！誰にも！

リヨウスケ ……。

チハル あなたも、そうでしょ？

リヨウスケ ……ああ、

チハル だから、花は、もう……

リヨウスケ ……。

クドウ、花束を掴み、出口へ向かって走る。

チハル クドウさん！

タエが抱きしめるように止める。暴れるクドウ。必死で止めるタエ。

その拍子に、花束が床に落ちて、暴れるのをやめる。

が、息は荒いまま……

チハル 今まで、ありがとうございました。

チハルは、クドウに向かって深々と頭を下げた。

クドウ 嫌です……

タエ クドウさん。

クドウ 嫌です……！

チハル ……。

クドウ 嫌です！

チハル 申し訳ありませんが、こういう時に優先されるのは、被害者の心情です。

クドウ 被害者はケンタロウくんです！あなたじゃない！

チハル ……。

クドウ 花がなくなっって、事故がなかったようにされて、忘れられたみたいになっ

て、ケンタロウくん、悲しむかもしれないじゃないですか。

チハル ……。

クドウ もしそうだったら、かわいそうじゃないですか。

リヨウスケ 調子に乗るな……！

クドウ この3年間、ケンタロウくんのことばかり考えてきたんです。

リョウスケ お前にケンタロウの何がわかる！

クドウ (チハルに) 花の1つも供えに来なかった、あなたよりもずっと……!

小さい沈黙。

チハル あなたにとってケンタロウは、5歳で死んだ男の子なんでしょう。でもね、

私たちにとっては、5年間生きた男の子なんです。

クドウ ……。

チハル 忘れたくないんです。死んだことじゃなくて、生きていたってことを。

クドウは抵抗する力を失い、立ち尽くす。

隣家から、ピアノの音色が聴こえてくる。たどたどしい、つかえつつかえのメ

ロデイ。

リョウスケは、床に落ちた花束を拾う。

リョウスケ (マリオに) 今日だけ、いいですか？

マリオ、無言でうなづく。

リョウスケ、クドウに歩み寄ると、花を差し出す。

それを受け取る、クドウ。

リョウスケ (チハルに) 帰ろう。

チハル 先に行つて。

リョウスケ え。

チハル どうせ帰る場所違うんだから。

リョウスケ 途中まで。

チハル また連絡する。

リョウスケ ……。

リョウスケ、出口に向かう。

チハル 元気でね……お父さん。

リョウスケ (振り返り) ……お母さんも。

リョウスケ、去った。

【8】

チハル、服を畳み、紙袋に戻し始める。

タエ お茶、お持ちしますね。

マリオ いいよ、俺が。

チハル おかまいなく。

マリオ いえいえ。(タエに) お前は休んでな。

マリオ、去る。

チハル 優しい旦那さんですね。

タエ 前は全然だったんですけどね、最近は。

チハル 何かキツカケが？

タエ さあ、なんでしょうね。

チハル (クドウを見て) でも良かった。ほんとびったり。

クドウ ……。

チハル 本当はもつとシュツとした服がお似合いなんですけど。(タエに) ほら、

クドウさんスタイル良いから。

タエ ああ、

チハル でも、こればかりは仕方ないですよね。

タエ え？

チハル、ゆったりとしたワンピースを広げて見せる。

チハル これからは、こういう服が必要でしょ？

タエ え、まさか……

チハル 言ったでしょ？クドウさんのこと、ずっと見てたって。病院に行くところも。

クドウ ごめんなさい……

チハル なんで謝るの？おめでたい話じゃない。だって……産みたいんでしょ？

チハル、立ち上がると、クドウの前へ。紙袋を差し出す。

チハル これ以上、誰かの人生が奪われるのを、見たくありません。

クドウ、紙袋を受け取る。

チハル、去ろうとして、ふと、立ち止まる。

チハル あの事故がなかったら、私たちずっと、知り合うこともなかったんでしょね。小さい町で、すれ違うことはあっても、言葉も交わすことなく、生きていたんでしょね。

チハル、去った。

しばらくして、マリオがお盆に湯飲みを4つ乗せて入ってくる。

マリオ あれ、帰っちゃった？

タエ ええ、

マリオ なんだよ、せつかく淹れたのに。2杯飲む？

タエ いい。

マリオ なんで？いつもおかわりしてるだろ？

タエ 今日はいい。

マリオ そう？（クドウに）どうぞ。

テーブルに湯飲みを置いていく。

マリオ あ、よろしければ2杯いかがですか？いえね、こないだね、静岡の友人から良いお茶つ葉もらったんですよ。

マリオが喋っている間に、クドウはタエに一礼して、去る。

マリオ なんでも品評会で金賞を獲ったらしくて（と、振り返り、クドウがいないことに気付く）あれ、帰っちゃった!?

タエ ええ、

マリオ ……お茶、3杯も飲めないよ。

と、言いつつ、マリオはお茶を一口飲む。タエは窓から交差点を眺める。隣家から、ピアノの音色が聴こえている。

## 【9】

マリオ 相変わらずヘタクソなピアノだな。

タエ 上達してるのよ、これでも。

マリオ いつまで経っても、つかえつかえ。

タエ ちょっとずつ、ちょっとずつ、成長してるの。

マリオ ふうん（と、またお茶を一口）

タエ ねえ、これってなんて曲？

マリオ 知らないのかよ。

タエ 聞いたことはあるんだけど。

マリオ 『花のワルツ』

タエ へえ、良い曲ね。

マリオ こんなじゃ良いかどうかもわかんないよ。

マリオは、1杯目のお茶を飲み干す。

マリオ ……あと2杯。

マリオは、2杯目に挑む。

タエは、窓から交差点を眺めている。

タエ ねえ。

マリオ うん？

タエ 私、死ぬの？

マリオ （笑って）え？

タエ ソブエさんとこに行ってからじゃない。あなたが、ここをマンションにするって言い出したの。

マリオ あんなヤブ医者、関係ないよ。

タエ 大学病院での検査だって。

マリオ ただの胃潰瘍だっただろ？

タエ じゃあ、なんで沖縄に住むの？

マリオ お前が言ったんじゃないか。いつか住みたいって。

タエ あなた嫌がってたじゃない。生まれ育った町から離れたくないって。

マリオ それは俺のワガママだから。

小さい沈黙。

タエ ごめんね。

マリオ ……。

タエ ごめん。

マリオ、2杯目のお茶を飲み干す。

マリオ あつちに腕の良い医者があるんだ。最高の治療をしよう。だから、大丈夫だよ。

タエ、座布団を部屋の隅に寄せる。

タエ 踊ろ？

マリオ え？

タエ ワルツって、踊るための音楽でしょ？

マリオ こんなピアノじゃ踊れないよ。

タエ なんで？

マリオ あっちこっちにぶつかったワルツで、うまく踊れるわけがない。

タエ いいじゃない。どうせ私たち、どんな上手なピアノでも踊れないよ。

マリオ だったらなんで、

タエ ほら。

タエは、右手を差し出す。マリオ、立ち上がり、その手をとる。  
2人、たどたどしく踊り始める。

マリオ どうしたらいいかわからないよ。

タエ どうしたらいいかわからないね。

バランスを崩したり、よろめいたり、たどたどしく踊る。

マリオ うまくできないな。

タエ うまくできないね。

なおを踊り続けていると、突然タエが笑い出す。

マリオ なに？

タエ 変なこと思っちゃった。

マリオ え、なに？

タエ 笑わない？

マリオ 笑わないよ。

タエ 生きてて良かった！

タエ、マリオの胸に顔をうずめる。マリオ、その身体を抱きしめる。  
つかえつかえの、たどたどしいピアノはいつまでも鳴り続ける。

ゆっくりと、暗闇が訪れる。

終

---

この作品の著作権は作者にあります。

無断複製・上演は法律により禁止されています。

上演許可などの連絡は、次にまでお願い致します。

Karuma\_engeki@yahoo.co.jp